

# 平成 13 年度委託試験で注目された病害虫防除薬剤

社団法人日本植物防疫協会試験事業部 あら い ま すみ かど た けん ご  
新井真澄・門田健吾

平成 13 年度の農業委託試験は、10 月 23 日に開催されたリンゴ農業連絡試験成績検討会を皮切りに、一般委託試験地域成績検討会並びに総合判定会議、各連絡試験成績検討会が順次開催され、12 月 18～19 日の生物農業連絡試験成績検討会まで、依頼された薬剤の各種病害虫に対する効果や薬害、使用方法の検討が行われた。

ここでは、平成 13 年度に依頼された試験を概括し、その中で、注目された薬剤並びにその傾向等について紹介する。

## I 平成 13 年度の委託薬剤の動向

### 〔殺菌剤〕

本年度依頼された委託試験薬剤は 226 剤（生物農業・展着剤を除く）で、複数の作物、病害に対して延べ 1,931 件の試験が国公立試験研究機関等で実施された。薬剤数及び総受託件数はわずかに減少した（図-1）。委託薬剤中、受付時に未登録の新規化合物を含む薬剤数は全体の約 2 割で、この割合はここ数年変化していない。

イネ・ムギ関係では、今年も箱粒剤が極めて多かったが、現場での多様な使用場面に合わせて、殺菌・殺虫成分の組み合わせやコンテンツを変えた様々なバリエーションが増加したことが一要因である。野菜関係は昨年とほぼ同数の試験依頼を受けたが、対象作物の栽培地域や対象病害の発生地域が限定された病害が多く、試験実施が困難な例が多かったため、試験件数は減少した。

落葉果樹、リンゴ関係は年により大きな増減を繰り返しているが、本年はブドウ、モモを中心に落葉果樹の試験が多くなった。これは、薬剤の適用拡大のピークが果樹ごとに時期をおいて現れることが要因の一つと考えら

れる。また、芝草では従来から現場で求められていた少ない散布水量への変更試験も一段落し、新規剤も見られなかったことから、薬剤数、試験数は大幅に減少した。生物農業については、今年初めて依頼された新規製剤は少なかったものの、2 年目を迎えた新規製剤の依頼件数が増加したこと、既登録薬剤の適用拡大が盛んであったことなどにより、件数は大幅に増加した。

### 〔殺虫剤〕

本年度依頼された薬剤数は 258 剤で（生物農業・展着剤を除く）、それぞれ複数の作物・害虫に対して延べ 3,110 件が試験され、稲対象の剤を中心に、薬剤数で 10 剤、試験件数では 150 件ほど増加した。また、新規成分の単剤は 51 剤と、ここ 3 年ほど安定したペースで開発が進められている（図-2）。しかし、近年の農業企業の合併で今後は薬剤の開発が効率化されると考えられる。今後は既知化合物の有効利用も重要性が増すと思われる。

試験分野別に見ると、イネ・ムギ関係では、前述のとおり大幅に試験件数が増加した。そのほとんどは殺虫殺菌剤混合の育苗箱施用剤で、処理時期も従来の移植だけでなく、緑化期や播種時、さらには床土混和など現場のニーズに合わせた開発が進められている。さらに、側条施用や直播き栽培用の種子処理、カメムシの粒剤散布など、さまざまな処理方法が試みられていた。野菜関係はここ数年の傾向どおり、適用拡大を中心に大きな変化はなかった。連絡試験はカンキツで若干減少したものの、落葉・リンゴ・芝草の各連絡試験では増加していた。

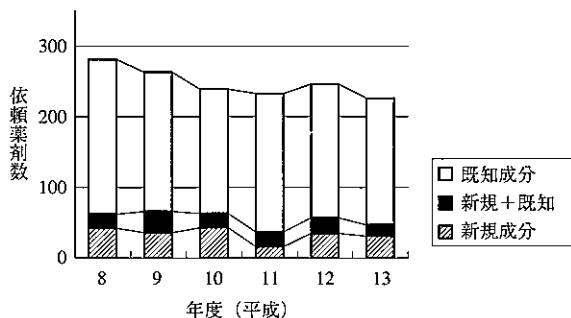


図-1 殺菌剤効果試験依頼薬剤数の推移

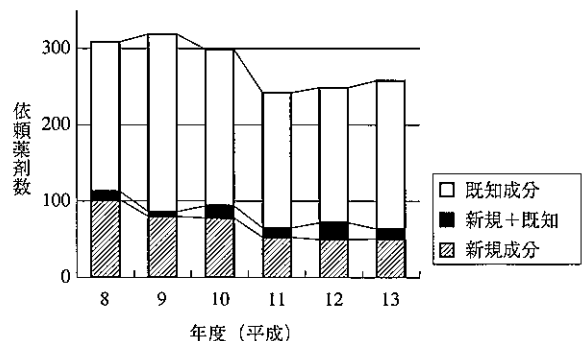


図-2 殺虫剤効果試験依頼薬剤数の推移